

乳児相互のかかわり合いについて —事例研究—

黒住佳代子*, 井桁 容子*, 小野 明美*, 佐々木聡子*, 川合 貞子**

(平成8年9月30日受理)

A Case Study on Interaction Between Infants

Kayoko KUROZUMI, Yoko IGETA, Akemi ONO, Satoko SASAKI and Teiko KAWAI

(Received September 30, 1996)

I はじめに

近年、働く母親の増加や家庭観・家族観の急激な変化は、集団保育のあり方にも大きな影響を与えている。延長保育による長時間保育、夜間保育、一時保育、そして乳児保育、障害児保育など保育に対して様々なニーズがあり、また、事業内保育施設や駅型保育園など、その形態も多様になってきている。もはや子育てにおいては、家庭保育か集団保育かの二者択一の問題ではなく、家庭と保育の現場とがネットワーク化され、乳幼児のより豊かな人間形成に努力していかなければならない時代にあるといえよう。

乳児保育を実施しているナースリールームにおいても、子どもの健全な成長を願いながら、常に家庭との連携を密にし、子どもの姿を見つめつつ日々保育をすすめている。

本研究では、集団保育の大きな特徴であり、メリットのひとつである乳児相互のかかわり合いについて着目してみる。毎日の保育の中で、乳児は他の乳児をよく見たり、自分より月齢の小さい乳児の頭をなでたり、頬ずりをしたりする。また、保育者の仲介がなくても乳児がお互いにあそびを誘いかけようような行為も見られる。乳児相互のこのようなとても細やかな視線や仕草、行動は比較的早い時期からみられる。

そこで乳児自身からのこのような行為は、どのようにして芽生え、どのような意味があるのか、また保育者はこの乳児相互のかかわり合いをどうとらえ、日々の保育

の中でどのような配慮をしていけばよいかを確認することを目的とした。

II 方法及び対象

東京家政大学ナースリールーム（産休明けから3歳未満児の保育室）の0歳児クラスにおけるかかわり合いについて、保育記録から抽出した事例をもとに分析・考察を行った。抽出した期間は、平成7年4月から平成8年1月までである。

本研究を行った平成7年度のクラス構成は図1の通りである。

ク ラ ス	こどもの人数	保育者の人数
0 才 児	5 名	2 名
1 才 児	4 名	1 名
2 才 児	5 名	1 名
合 計	14 名	4 名

図1 平成7年度クラス構成

対象児は、下記の5名であるが、今回は人に対して好奇心が強く、他児とのかかわり合いが頻繁に見られたS児を中心に分析した。

対象児 乳児室に在室する5名の乳児（図2を参照）

S児（男） H 6. 10. 29生

入室 H 7. 4（生後5ヵ月）

家族構成 父・母・姉（4歳）・祖父母

R児（女） H 6. 11. 21生

入室 H 7. 4（生後4ヵ月）

家族構成 父・母・兄（3歳）・祖父母

* 東京家政大学ナースリールーム

** 東京家政大学児童学科児童心理学研究室

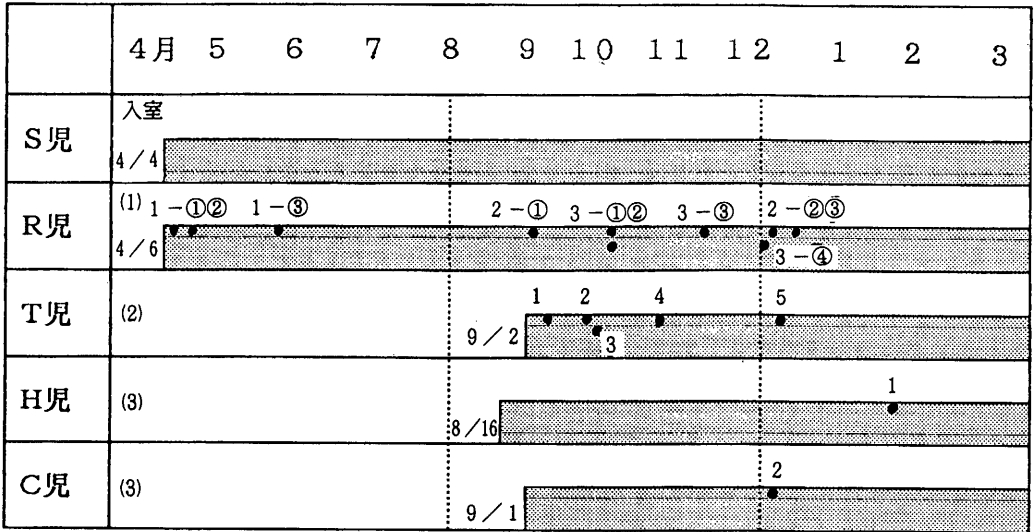


図2 入室期間と事例のみられた時期

注) 日付けは入室日

- T児(男) H 6. 12. 27生
入室 H 7. 9 (生後8カ月)
家族構成 父・母
- H児(男) H 7. 6. 3生
入室 H 7. 8 (生後2カ月)
家族構成 父・母
- C児(女) H 7. 7. 13生
入室 H 7. 9 (生後1カ月)
家族構成 父・母・兄(2歳)

Ⅲ 事例と考察

(1) 月齢の近いR児とのかかわり

事例

1. 相手を見る (S児 5カ月から6カ月・R児 4カ月から6カ月)

① 4/12

R児はS児と腹這いで向い合うと嬉しそうな顔をして笑う。

② 4/20

R児は保育者がラッパを吹くと、そのことよりもラッパの音を聞いて変わるS児の様子を見て楽しんでいる。

③ 5/25

S児・R児共に相手が見えるような位置で腹這いであそんでいるとき、S児はR児に気付きR

児の方へ前進していく。R児はこの時はまだ前へ進むことができず、その場で近づいてくるS児に触ろうと、ニコニコしながら、手をバタバタさせている。

2. とりっこ (S児 10カ月から1歳1カ月・R児 9カ月から1歳)

① 9/4

R児がラックに座っていると、S児はR児の顔を触ったり、髪の毛をひっぱったりする。R児は次第に怒り出し、顔を真っ赤にして泣く。

② 12/4

S児が保育者の膝に座っている時にR児が近づいてくると、「きちゃダメ」というようにR児を押す。また、S児がラックであそんでいる時にR児が近づいてくると、S児は同じようにR児のことを押す。押されることが重なると、R児は、S児の指が口もとにきた時にかみつく。

③ 12/13

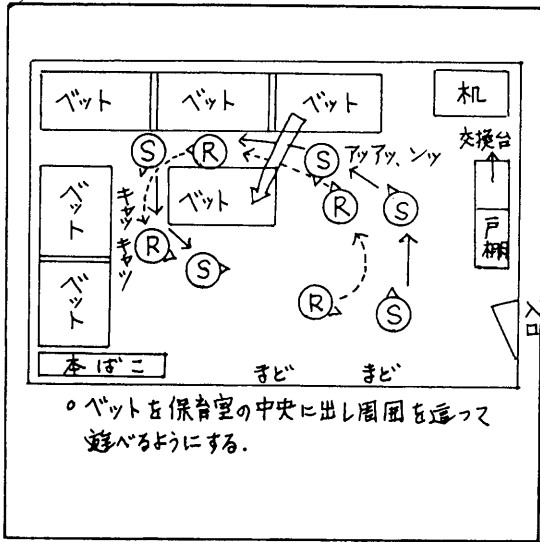
S児はあそんでいた車をR児に取られベソをかく。保育者が別の車を渡すが、再びR児に取られ、激しく泣きながら保育者の顔を見る。

3. あそびの共有 (S児 11カ月から1歳1カ月・R児 10カ月から1歳)

① 10/5

S児が這ってあそんでいるとR児も後ろからつ

いて追っていく。それに気付いたS児がR児に「アッアッ」「ンッ」と言ってスピードを上げ追いはじめると、R児もスピードを上げS児を追いかける。R児がS児を追いかけるあそびとなり、キャッキョッと声を上げながらベットのまわりを追いまわす。



○ベットを保育室の中央に出し周りを這って遊べるようにする。

図3 事例〔1〕-3-①

②10/5

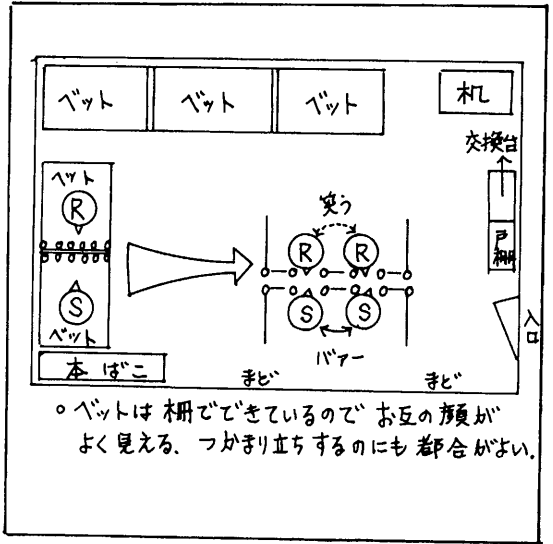
S児とR児のふたりで、ビーズクッションの上にておれこんでは笑い合う。

③11/9

S児は午睡から目を覚まし、隣のベットにR児がいるのに気付く。ベットの端までいって、柵の隙間からのぞきこむと、R児もS児に気付く、ベットの端まで寄ってくる。S児が「パー」と言って隙間から顔をのぞかせると、R児も同じ隙間から顔をのぞかせる。R児が左右の隙間から交互に顔をのぞかせると、S児も「パー」と言いながら同じ方向に顔を動かす。S児の顔が見えるとR児は声をたてて笑い、しばらくの間ふたりであそんでいる。

④12/1

S児はR児が吹いているラッパを取り、あたりかまわず口に入れて吹こうとする。音を出すことができず、一度はラッパを返すが、R児が再びラッパを吹くと、S児は再びラッパを取る。



○ベットは柵でできているので「お互いの顔がよく見える。つかまり立ちするのにも都合がよい。」

図4 事例〔1〕-3-③

考察

事例1では、入室して間もない頃から（S児は6ヵ月から、R児は4ヵ月から）お互いの存在に気付き、興味をもって相手を見ている様子がみられ、特にR児は、事例1の②では、ラッパの音よりもS児の様子を楽しみ、また事例1の③では、S児が近づいてくるのを喜んで様子がみられる等、S児に対する関心の強さがうかがわれる。嬉しそうな顔をしてニコニコ笑ったり、手足を動かしたりする等、子どもの表情や行動が豊かであることが、子どもを相手に向かわせる要因となっていると考えられよう。

半年後の10月には、事例3の①のように、這い這いができるようになって自由に動けるようになったり、喃語が活発になると、自分から相手に近づいたり、動作のやりとりをしているうちに、自然に追いかけるあそびが生まれていることがわかる。事例3の②のような楽しみは、ビーズクッションにたおれ込むこと自体よりも、そこでつくり出される楽しさそのものを、一緒にあそんでいるもの同志が、感覚的に体で感じ合うことができるものだといえる。このような楽しい経験をお互いの中で共有できることの積重ねが、事例3の③のような、目覚めた時のとかく不機嫌になりがちな場面においても、お互いの存在に気付くと、どちらからともなく誘いかけ、楽しいあそびが展開しはじめるという関係をつくっていると考えられる。

子ども同志のかかわり合いでは、もちろん心地よいかかわりばかりではなく、事例2のようなかかわりもみられる。心地よい保母の膝の奪い合いや玩具の取り合い等、この時期の乳児には当然起こり得る事柄であるが、取られて泣いたり、取って相手が泣いたりするという経験を通して、自分自身の気持ちや相手の気持ちを理解する基本が芽生えてくる。一見ネガティブに思われるこのようなかかわりも、楽しい経験を共有しながら生活を共にする相手となれば、乳児にとって、相手を知っていくうえで大切なものだと考えられる。

S児とR児は図2からもわかるように、月齢も近く、同時期の入室であった為、一緒に過ごすことも多く、生活を共にすることや経験を共有することで、お互いのペースを体で感じ合い、関係を深めていったのではないだろうか。

事例に示したエピソードをはじめとして、これらの乳児の行動を保育者がどうとらえるかによって、子どもの行動の意味が異なってくるであろう。我々はこれらの行動を、子どもが豊かに育っていくうえで大切な行動ととらえ、月齢の近いふたりを、意図的に相手の見える位置に腹這いにしたり、ベットの隣あわせにした。同じような姿勢のとれる乳児が、お互いの存在を自然に視野に入れることができる距離や位置、そのタイミングをはかることは、子どもと子どものかかわる機会をより多く用意することであり、このことは乳児相互のかかわり合いに重要な役割を果たしているということがいえる。

〔2〕途中入室のT児とのかかわり

事例 (S児 10ヵ月から1歳1ヵ月・

T児 8ヵ月から11ヵ月)

①9/12 - T児が入室して2週間後-

保母の膝に座っているT児の顔をS児が触りに行く。T児はS児にされるがままにじっとしている。

②9/28 - 3週間後-

T児はS児の後を這い這いで追いかける。その範囲は乳児室だけにとどまらず、廊下・職員室へと日ごとに広がっている。その際T児がS児より前へ出ることはなく、またS児はT児がついてきていることを知っているようで、時々後ろを振り返り、T児がついてくることを確認している。

③9/30 - 1ヵ月後-

S児が入室してくると、T児は嬉しそうに笑い、

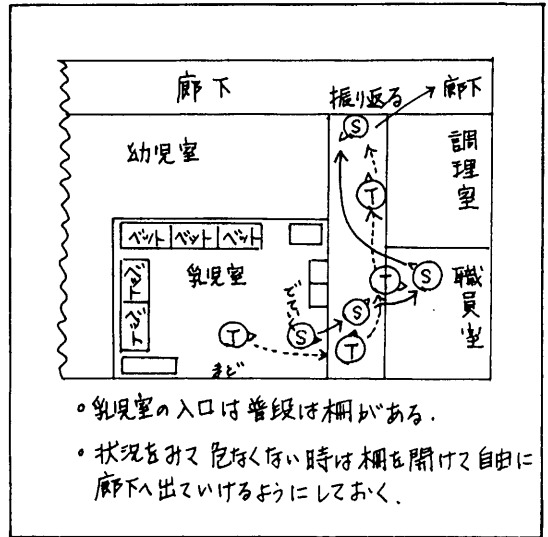


図5 事例〔2〕-2

入口の方へ這っていく。

④10/25 - 2ヵ月後-

T児が座ってあそんでいると、S児が近づいてきて自分のおでこにそっと2回あてる。するとT児は表情を変えずに1回あてかえす。

⑤12/7 - 3ヵ月後-

T児がリングをはめこむおもちゃの土台であそんでいると、S児がリングを持ってきてT児に渡す。するとT児はそれを受けとり土台にはめこむ。

考察

T児は平成7年の9月に入室してきた。核家族で、それまでは家族以外の人や、年齢の近い子どもと接する機会はほとんどなかった。T児のそれまでの生育過程を考慮し、T児のペースを守る為に、T児の受ける刺激の量(一度に保育時間を伸ばさず、1ヵ月をかけて1日保育にしていける)、質(年齢が上の他児にかかわられると不安になっていたため、異年齢児との交流を避ける)等を調節した。

T児は、入室して間もない頃から、這い這いで部屋中を動きまわり、他児にも保育者にも積極的に働きかけるS児に興味をもち、そのS児を見る為に、自然と保育者の膝から離れていった。そこで保育者はT児のS児に対する興味を持続・促進させる為に、S児があそんでいる姿が良く見える位置でT児を抱いて座ったり、T児がS児の後についていった時は、不安になら

ないように保育者もT児の後からついていくなどした。

S児とT児の保育室でのエピソードをみると、事例1のように、はじめはただS児からの働きかけを受け入れるだけだったが、事例2では、T児はS児についていくことで結果として、行動範囲を広げ、さらに事例4のように、S児の働きかけに申し応じるようになり、事例5では対等なかかわりになっている。このようにS児の存在はT児が新しい環境に馴れていく過程において、大きな役割を果たしているといえよう。

T児とS児のこのようなかかわり合いは、仲間関係を形成しうる1歳児が集団で保育を受けることの意味の中で金田氏等が述べている『発達のレベルの近い他児の行動は、子どもにとって取り入れ可能な発達の次のステップを提供し、それが大人が提供する足場(scaffolding, Bruner)や発達の最近接領域(Vygotsky)と同様の機能を果たしうると同時に、他児がモデルとなることでより強く動機づけられると思われる』(金田利子等『集団内行動の発達に関する研究』¹⁾)という見解と一致していると考えられる。

〔3〕月齢の小さい乳児とのかかわり

事例

1. あやす

H 8. 1/19 (S児 1歳2ヵ月・H児 7ヵ月)
H児とS児の食事の時間が同じとなり、ラックをとなりあわせて食べはじめる。するとH児はからだをよじらせ手を伸ばしS児に触り、笑いながら「ウー」と声を出す。すると、S児もH児のほうへからだをよじらせ、そして「タン」と舌をならす。S児の様子を見てH児が声をたてて笑うと、S児は何度か舌をならすことを繰り返す。翌朝、S児とH児が入口のところで会うと、S児は保育者に抱っこを要求し、母親に抱かれているH児と同じ高さになると、S児はH児の方へ身をのりだして、前日したように「タン」と舌をならす。

2. かわいがる

12/5 (S児 1才1ヵ月・C児 4ヵ月)
C児が入室して3ヵ月が過ぎるころから、S児は入室すると最初にC児をさがし、見つけると「アッ」と言って近づいていき、C児と同じ目の高さになり(腹這いならばS児も腹這いになり、抱かれていれば立ったままの姿勢で)、自

分の顔をC児の顔に近づけ頬ずりをするようになる。

—この行為は、毎日のように繰り返される。その後3週間の冬休みをはさみ、S児とC児が久しぶりに顔をあわせると、S児は真っ先にC児を見つけ、12月同様に頬ずりをする—

考察

S児は、H児・C児の入室当初から、保育者が抱いたりオムツをかえたりしていると、近づいてきて見ていることが頻繁にあった。4月に入室したS児は、H児・C児が入室した8月9日には、すでに保育室にも慣れ、心身共に安定した状態で過ごしていたことや、S児の人に対する旺盛な好奇心から新入室児に対し自然な形で興味が持てたのであろう。はじめの頃は、生後2・3ヵ月の乳児であるH児・C児との接し方がわからなくて、勢い良く近づいたり、顔に触ろうとするなど、一見乱暴に見えるようなかかわりがみられたが、保育者がH児・C児に接している様子を見たり、S児の行為に対して、その都度「そっとね」「かわいいね」など、具体的にかかわり方を示していくうちに、S児なりに年少のH児・C児とのかかわり方を学び、表現できるようになったと考えられる。H児・C児がベットで遊んでいると、柵から顔をのぞかせて声をかけたり、保育者がいつもH児・C児に渡している玩具を持っていってあげるなど、S児のかかわるタイミングの良さやあやし方のうまさには感心させられることも多かった。H児・C児は、生後6ヵ月頃になると、S児があそんでいるのを見ることがあそびとなり、S児が視界から消えると泣いたり、またS児が近づいてくると喜ぶような場面もみられた。事例1・2の場合のように、はじめは偶然で意図した働きかけではなかったものが、そのS児の行為に対して、H児・C児が笑ったり、喜んだりするという応答的な反応が示されることによって、S児にとっては、さらに相手への興味が増し、同じ行為が繰り返され、H児・C児との間にあやし・あやされるという関係が、確実な形でお互いの中に受け入れられている姿がうかがわれる。

これらは、S児自身のもつ興味によって偶発的にはじまり、自然に深まった行為であり、それゆえに行為が翌日になっても再現されたり、長期の休み明けにも見られたりしたのであろう。このことから、自発的な行為が子どもに与える意味の大きさがうかがわれる。

また、事例1のようにあやすような行為は月齢に近いR児・T児に対してはみられない行為であり、相手が自分よりも幼くて、一緒にあそぶ相手ではなく、あやしたり、かわいがったりする相手であると認識しているS児の様子に驚かされる。

一方、H児・C児ともに低月齢からの入室である為、個々の生活リズムや落ち着いて過ごせる環境に配慮しながら、機嫌の好いときに、心地よい範囲でS児とのかかわりがもてるよう心がけたが、その積重ねが、H児・C児にとって、S児を好意的に受け止める土台にもなっていったと考えられる。

IV ま と め

乳児期は特定の大人とのアタッチメントの確立が大きな課題であり、その為に乳児保育の場では、保育者との関係に重点がおかれることは当然である。また、一方では事例のように乳児が自ら働きかけることによって、早いうちから乳児相互のかかわり合いがみられ、それが、生活の中で乳児自身の経験を広げ、深め、人とかかわりの基礎となる相手の呼吸をとらえるということを自然

のうちに体験しているのは見逃せない。このことは、家庭においては体験しにくいことであり、人間関係が稀薄になってきている現代において、集団で乳児を保育する場である、乳児保育のもつ重要な役割のひとつであることにあらためて気付かされる。これからは、乳児保育が、保育者との愛着関係を土台として、個々の育ちを受け止めた上で、乳児相互のかかわりの経験を広げる場として積極的に考えられるべきではないだろうか。さらに、親と保育者が良きパートナーとなることで、近年低下してきていると言われている育児能力の向上にも繋がるのではないかと思われる。

(本研究は日本保育学会第49回大会に於て発表したものに加筆した。)

注

- 1) 母子関係と集団保育 金田利子・他著
1990. 2 明治図書 pp. 113

参考文献

- 視界ゼロの家族 小比木啓吾 1996. 8 海竜社